「ネットいじめ」事件に見る「投稿者」問題の顕在化

早稲田大学　北嶋健治

1　目的

本報告の目的は,子ども・若者の問題として今日論じられる「ネットいじめ」という社会問題に見る情報技術とその利用者観との関連性を明らかにすることにある.当問題は,これまで国内で論じられてきた「いじめ」問題の性質に,インターネットを利用した加害主体としての「投稿者」の問題を含み込むものである.これらは,動画や画像等の「転載」・「拡散」といった,インターネットの特性と関連付けられつつ,さらに個人の「特定」や「中傷」といった,「いじめ」内容の投稿を行った加害者自身への影響を論ずるものとなっている.この報告では,そのような「ネットいじめ」に見る「投稿者」の問題が社会問題として顕在化していく過程を分析し,その問題化の過程における「いじめ」加害者と情報技術との関連性を考察することで,個人のインターネット利用が他者によって解釈され,またその利用が「逸脱」的なメディア利用として社会問題化されていくメカニズムについての検討を行う.

2　方法

本報告では,「ネットいじめ」問題において議論される「投稿者」を,インターネット利用に関連付けられた「非行」の主体として位置づける.とりわけ, 広義の「非行」としての「いじめ」問題が法の規準に基づく狭義の「非行行為」として認識されるにいたるまでの過程を取り扱い,彼らの「投稿」行為をめぐる問題の性質の変化を検討する.そこで, 「ネットいじめ」事件とされた各種事件の報道や資料を対象に,「非行」と「非行行為」の区分,「加害者」・「被害者」の分類,事件化の契機といった分析軸を用いて,「非行少年」らのインターネット利用が問題化されていく過程について,分析を行う.

3　結果

分析から, 今日論じられている「いじめ」加害者としての「投稿者」自身への影響という問題は,少年らが制度的に「非行少年」として認識される以前に問題化された利用行為が注目されるなかで生じたものであることが分かる.かねてから「ネットいじめ」事件については,広く「非行」と見なされるインターネット利用に加え,利用者についての情報の問題が議論される場合があった.とりわけ「いじめ」加害者である「投稿者」への影響が懸念されるという事態は,「非行行為」が認められる際に参照されていたそのようなインターネット利用に関する問題が強調されるなかで生じている.

4　結論

本報告では, 分析結果に対する考察として, かねてから「非行少年」たちのインターネット利用に対する「逸脱」視が, 他者による「動機」理解を媒介に行われてきたという点に着目し, 今日のいくつかの事件においては,「非行少年」とインターネット利用との関連付けの手続きが, そのような内面性の解釈を経由せずになされる傾向にあるということについて, 検討を行う。そこから示唆されるのは,「非行」の解釈手続きにおいて, その主体に関連付けられていたインターネット利用それ自体が問題として顕在化するという事態であり, この点についてのさらなる考察が今後の課題となる.